

鍛冶屋町通り / 城下町の歴史、鍛冶屋について

人吉・球磨エリアでは、江戸時代（1603-1867）を絶頂期に、鍛冶屋が繁盛しました。当時、人吉の城下町には、60軒ほどの鍛冶屋が並んでいたという記録が残っています。そのほとんどは、農業で使う工具やその他の道具の製造・修理や、牧場、家庭、工業向けの金物を取り扱っていました。

人吉の鍛冶屋町は、川を挟んで城の向かい側にある職人地区にありました。鍛冶屋町の名前や境界は今も保全されていますが、現在も営業している鍛冶屋は残っていません。ここでは、当時の様子を想像しながら古い街並みを散策することができます。

近代化により、人吉の鍛冶産業はほんの一部の家系に減少していきました。これらの鍛冶屋では、未来の世代のために人吉の鍛冶の伝統を保全しており、自動化された機械に頼らず、鍛錬により磨かれた技術だけで道具を製造しています。

農業用のくわ、かま、大鎌や、林業用のなた、おの、金槌などは、人吉の鍛冶屋がつくるものの中でも最も一般的な道具でした。しかし、このような伝統工具の需要は、動力工具や農業機械の台頭により減少し、残った鍛冶屋は、通常、台所包丁、レジャーナイフ、ハサミといった、その他の刃物を専門に扱っています。今も残っている鍛冶屋の多くでは、作業場から商品を直接販売しているので、鍛造の工程を一部見学することもできるかもしれません。